

Research Paper Series

No. 103

言説への（再）接続と解除としての制度化：フリーランス言説における騎士・従僕・英雄

宇田忠司† 高橋勅徳‡

2012年 3月

† 北海道大学大学院 経済学研究科

‡ 首都大学東京大学院 社会科学部研究科

1 はじめに

本論文の目的は、言説分析を用いて、テキストの生産・伝播に不可避に生じる権力関係の構築プロセスとして、制度化を分析していくことである。

制度派組織論において制度とは、倫理的・存在論的地位を獲得した自明の社会的事実として定義される (e.g., Meyer and Rowan, 1977)。制度派組織論の独自の視座は、この制度を起点に現象を捉え説明していくことにある。人々は制度を参照することで自ら追求する利害を見出し、利害の達成に必要な資源を動員するための戦略を想起し、支配的な権力関係を形成することが可能となる (e.g., Lawrence, 2008)。

この制度を起点とした権力関係の構築を分析する方法として求められているのが言説分析である (e.g., Phillips et al., 2004)。制度は、人々の間で交わされる読み、書き、話すといったテキストの生産・伝播を通じて自明性を帯び、社会的事実として現前する。同時に、人々はテキストを生産することで正統性を獲得し、必要な資源を動員し利害を達成しうる権力関係の構築が可能となる。このように、制度派組織論において言説分析は、テキストの生産・伝播に不可避に生じる主体間の権力関係に注目することで、制度化のプロセスを具体的に捉えうる方法であると考えられる。

そこで本論文では、先行研究の検討から得られる理論的視座を提示し (2)、フ

リーランス言説の分析を試みた上で (3)、これらの分析から得られる理論的含意について考察する (4)。

2. 制度と言説分析

本節ではまず、先行研究の検討を通じて制度派組織論が言説分析を必要とした理論的根拠を提示した上で (2.1)、制度派組織論の主要概念 (同型化, 正統性, 組織フィールド) と言説分析の理論的架橋を行う (2.2)。その上で、発話によって言説への (再) 接続・解除を図る多面的な政治的闘争のプロセスとして制度化を分析していくという、本論文の分析視角を提示する (2.3)。

2.1 事物／制度／言説

言説とは、事物 (object) を構成する声明 (statement) として定義される (Parker, 1992, p.5)。人々は、他者に宛ててテキストを書き、話すというテキストの生産・伝播を通じて事物を構成していく中で、アイデンティティを見出し、有意味な行為が可能となる。ここで注意すべきは、集積したテキスト自体が言説や事物ではないことである。個々に生産されるテキストは、他者に届けられ伝播していくことで初めて事物と化す。当然、全てのテキストが流通し伝播するわけではない。政治家や学者、ジャーナリストなど、既にテキストの生産・伝播をなし得る支配的位置にある主体が生産するテキストは伝播し易い。それゆえ、事物は

その事物を記すテキストを生産し伝播させる権力関係の空間的広がり、すなわち言説として対象化され理解可能となる (e.g., Foucault, 1977)。ここに、制度派組織論が言説分析を必要とした理論的根拠がある。自明の社会的事実たる制度は、テキストの生産・伝播に不可避に関わる権力関係、すなわち言説から生み出されるのである。

ここで注意すべきは、制度の意味内容を解明するために言説分析が求められていないことである。制度派組織論において、自明の社会的事実たる制度は分析起点であり、その分析の焦点は制度を参照することで可能となる主体の行為にある。ここで求められるのは、制度自体の意味内容を問うのではなく、制度を担う人々の実践的位相から現象を把握し分析することにある (e.g., Greenwood et al., 2008)。それゆえ、制度の意味内容として言説を固定的に分析した瞬間、制度を分析起点とする制度派組織論の理論的意図は転倒してしまう。制度と言説の間で生じるこのような転倒を回避するために、我々は改めて言説分析という方法の理論的意図に立ち戻る必要がある。

Foucault (1969) は、言説分析について、「言説が途を開いているのは、既存の様々な主題に生気を与え、相対立する戦術を生じさせ、相容れない諸利益とかわり、確定された諸概念の働きによって、相異なった諸部分を働かせる、相異なった可能性ではないだろうか(邦訳, 58 頁)」

と指摘する。事物(制度派組織論における制度)は、確かに言説の内で現前する(生気を与えられる)。同時に、人々は言説の内で自らの利害を見出しその利害の達成を目指してテキストの生産・伝播を駆使する戦術を構想することも可能となる。このような戦術の遂行は事物に新たな生気を吹き込む。

それゆえ、ある事物を言説として確定しようとした瞬間、言説分析という方法の理論的意図から外れるという困難がつきまとう(佐藤, 2006, 16 頁)。ここで言説分析に求められるのは、当事者がテキストを生産し伝播していく行為から明滅する事物を把握していくことにある。以上の Foucault が言説分析に込めた理論的意図を踏まえることで制度と言説を巡る転倒を回避することが可能となる。制度派組織論では、制度が産出され維持され変化していく制度化のプロセスを、テキストの生産・伝播から把握するために言説分析が必要とされたのである(Phillips et al., 2004, pp. 637-640)。

2.2 言説への(再)接続と解除としての制度化

それでは、先行研究において言説分析はいかに用いられ、制度化のプロセスが分析されてきたのだろうか。Phillips et al. (2004) は、言説と制度派組織論の諸概念(同型化, 正統性, 組織フィールド)の関係を定位し、制度化のプロセスを以下のように示している。

まず、言説分析を用いることで、同型化という現象を、自明の社会的事実たる制度から利害を見出し、自らの支配を実現する権力関係の確立を目指してテキストの生産・伝播を図る発話から捉えることが可能となる。例えば Palmer et al. (1993) は、米国での事業部制組織の普及を、ビジネススクールで学んだ専門経営者が、社会的事実と化した「組織は戦略に従う」という言説に接続したテキスト（例えば、事業計画書）を生産することで株主や投資家を巻き込む正統性を獲得し、企業支配を確立していく過程として分析する。すなわち事業部制組織の普及とは、テキストを生産・伝播しうる位置を占め、言説と接続し正統性を得た主体が同型化圧力を産みだし実現される支配的な権力関係、すなわち組織フィールドの構築プロセスとして説明される¹。

ここで注意すべきは、テキストの生産・伝播をなし得る支配的位置を強調する余り、同型化を既存の権力関係の所産として理解してしまうことである。そのような理解は、制度を起点に現象を把握し人々の実践を捉えようとする制度派組織論の理論的意図から外れてしまう。そこで求められるのは、制度の内から変革の動機と機会を獲得し制度変革を試みる発話への注目である。例えば Zilber (2007) は、イスラエルのハイテクベンチャー集積における当事者の語りに着目する。具体的には、企業家、ベンチャーキャピタル、専門家（法律家・税理士）

の相互補完的關係に基づく理想的な産業集積の成立という支配的言説の下で、この産業集積が衰退した原因を無能な企業家に求めるベンチャーキャピタルと、強欲なベンチャーキャピタルに求める専門家による対抗的語り (counter narrative) が、会場内のセッションで即興的に繰り上げられることが明らかにされる。この、ベンチャーキャピタルや専門家達が繰り広げる対抗的語りは、ハイテクベンチャー集積における支配の確立を目指して、各々の敵対者を支配的言説から解除し自らに有利な形で再接続を図る言語的戦略として分析されるのである。

この言説への（再）接続による制度変化の分析を試みたのが、Maguire and Hardy (2009) である。彼らは、カーソン (1962) の『沈黙の春』が出版され、農薬 (DDT) による生態系への悪影響が社会的事実と化した後、農学・生物学における論文の内容が農産物の生産性向上から DDT による昆虫・水生生物への被害へと転換したことを指摘する。この学術界における転換は、法規制の根拠を学術論文に求める FDA の介入を招き、農産物への DDT の使用が禁止されたのである。

ここで注意すべきは、当事者の発話が学者の生産するテキストにすり替わるかたちで制度化が分析されてしまうことである。事業部制の普及にせよ、ハイテクベンチャー集積の再編成にせよ、支配的な権力関係の確立に学術的テキストの生産が不可欠であれば、論文内容の転換に

着目する分析のみで事足りる。このような分析は学者のテキストが制度の意味内容に滑り込むことを意味し、制度派組織論が目指す理論的意図から外れるだけでなく、学者のテキストの生産・流通が事物として確定されるため、言説分析の理論的意図からも乖離することになる。

この問題を回避するために提唱されるのが、批判的言説分析 (critical discourse analysis) である。ここでは、学者と当事者との結託によって成立する支配的な権力関係を暴く、徹底した批判的態度が求められる (Clegg et al., 2007, pp. 301-306)。例えば Khan et al. (2007) は、シアルコットのサッカーボール縫製産業における児童労働撤廃の事例に注目し、社会的企業家言説に接続することで、国連、政府、メーカーが確立した収奪的な権力関係を、縫子による肉声を用いて当該言説との接続を解除していくことで、逆説的に明らかにしていく。ここで注意すべきは、批判的態度の下で支配的な権力関係を暴くだけでは制度化のプロセスを十分に捉えたとは言い難いことである。実際 Khan らは、彼らを取り上げた縫子の肉声がジェンダーや人権問題として捉え直すテキストとして社会的企業家言説へと再接続されることで、シアルコットにおける支配的な権力関係の再構築へと導く可能性を得ることを指摘するだけでなく、それがシアルコットにおける収奪の構造への解決策ではない事を強調する (Khan et al., 2007, pp.1071-1072)。こ

のように、我々は、言説分析を用いることで自明の社会的事実を生み出す言説の下で利害を見出した人々が、言説への解除- (再) 接続を繰り返す不断のプロセスとして、制度化を捉えることが可能になるのである。

2.3 絶えざる闘争過程と言語的戦略

本論文ではこれまで、制度派組織論が言説分析を必要とした理論的根拠及び制度派組織論の諸概念と言説概念の関係を定位した上で、言説分析によって理解することが可能となる制度化のプロセスを、具体的な先行研究の検討を通じて明らかにしてきた。本節では最後に、先行研究の抱える理論的課題を検討していく中で本論文の分析視角を提示していく。

これまで述べてきたように、言説分析を用いることで、我々は、言説への (再) 接続-解除を図る発話から制度化を把握することができる。例えば、同型化と組織フィールドの形成を捉えた Palmer らにせよ、制度変化を捉えようとした Maguire らにせよ、制度化のプロセスとは言説に独占的に接続し得る支配的な位置を占める主体による支配的な権力関係の確立として把握される。

他方で、言説への接続によって支配が達成されるが故に、人々は抵抗の機会を見出し言説から解除・(再) 接続を図る「抵抗する語り (Zilber, 2007)」が可能になる。言説分析が途を拓くのは、言説への (再) 接続-解除として当事者が駆使する

言語的戦略から絶えざる闘争過程として制度化プロセスを把握するという、新たな理論的地平であると考えられる。

この絶えざる闘争過程としての制度化プロセスについては、Khan et al. (2007)が、縫い子の発話がジェンダーや人権問題を介して社会企業家言説へと（再）接続される可能性として萌芽的に論じてきた。しかし、批判的言説分析を掲げる彼らの力点は、縫い子の肉声を梃子に既存の権力関係を暴くことにあり、言語的戦略から制度化のプロセスを把握していくことではない。それゆえ、彼らの研究もまた、制度を言説として固定化するという先行研究の転倒を回避し得ていない。

したがって、言説分析によって制度化を捉える際に重要となるのは、批判的態度の下で駆使される言語的戦略に注目し、制度を言説として固定化することなく制度化のプロセスを把握していくことにある。そこで本論文では、コンテンツ産業に従事するフリーランスの語りを、言語的戦略という観点から把握し、絶えざる闘争過程として制度化を分析していく。

3. フリーランス言説における騎士・従僕・英雄

本節ではフリーランス²の言説分析を試みるが、その理由は下記の通りである。

フリーランス達は、基本的にクライアントからの依頼により仕事契約が成立する以上、必然的にコンテンツ産業の支配を巡る権力関係に巻き込まれている。こ

のような中、フリーランス言説では、自由や自律、創造（変革）を体現する主体としてフリーランスが位置づけられる一方、服従や隷属を象徴する存在として対象化されるなど、彼らを語る主体によって異なる意味を付与されたテキストが生産・伝播されている。ただ、その過程で不可避に生じる権力関係の構築プロセスや、その下でフリーランス言説への（再）接続-解除として駆使される言語的戦略はほとんど明らかにされていない³。

以上のことからフリーランス言説は本研究の目的に相応しい対象であるといえる。そこで本論文では、フリーランス⁴に関するテキスト⁵と 2002 年から現在に至るまで断続的に実施したフィールドワーク⁶に基づき、彼らの言説分析を試みる。

3.1 騎士としてのフリーランス

フリーランスの語源は、free-lance（自由な槍）からも想起できるように、中世の傭騎兵である。彼らは忠誠心や主従関係に囚われない騎士であり、報酬や戦の意義を受け入れられればどの君主の下でも戦った。時代が下るとともに、フリーランスという用語は特定の企業に属さずにその都度契約を結びながら働く個人に広く用いられるようになった。特にコンテンツ産業では、フリーのデザイナー、ディレクターなど頻繁に使用される。彼らは企業の請負ではあるが、契約に際して自由意思を有する立場に誇りを見出し、フリーランスを名乗った（早川, 1986）。

このような、自由や自律を強調するテキストの生産・伝播を通じて、あるべきフリーランスの姿としてシンボル化されたのが「騎士」としてのフリーランスである。具体的には、企業での雇用から外部人材との契約への移行が指摘される中 (Bridges, 1994)、フリーランスは自らの知識や技能を基に自律的で柔軟に働く存在として描かれる。例えば Handy (1994) は、ポートフォリオ・ワーカー (portfolio worker) という概念を提示し、分散投資家のように複数のクライアントと契約しながら自律的に働く個人の台頭を指摘する。また Malone and Laubacher (1998) は、自由かつ一過的にネットワーク・コミュニティに参加しながら、財・サービスの生産・販売に独立して取り組む個人を e ランサー (e-lancer) と名付け、柔軟で創造的な彼らの離合集散型の協働様式を積極的に評価する。さらに Pink (2001) は、特定の企業に雇われずに働く個人をフリー・エージェント (free agent) と呼び、市場価値のある技能を有する彼らが社会を牽引すると訴える。以上のように、「騎士」を称揚するテキストでは、主として伝統的な雇用下での抑圧や不条理といった負の側面が喧伝される一方、耳触りの良い新たな概念を通じて、企業から独立し自律的に働く個人が自由と自己責任の時代を象徴する人物として賛美される。実際フリーランス達は、騎士としての自負を以下のように語る。

好きでやってるといのは、逆にいうと嫌な仕事はある程度断るんですね。断る選択権はこちらにあるんです。そりゃお金は入ってきませんがね。入ってこないけども嫌なものは断る。お金が少なくても好きなものはやる。その選択権が大きい。(A 氏:男性イラストレーター)

ホントに好き勝手できるんで。たとえば、じゃあ今月 2 週間休んで旅行に行こうかなというのも自分で決めれるし。(中略)仕事に没頭したいとしたら没頭できるし。(中略)だから子供もいるんで、(中略)学校の用事もあったり、そういうのも全部自分で何もかも生活も仕事も含めてちゃんと決めれるんで。(B 氏:女性スタイリスト)

ここで注意すべきは、彼らにこのような発話を促すコンテンツ産業の権力関係である。騎士としてのフリーランスというシンボルは、自由や自律を強調するテキストの生産・伝播を通じて、企業での雇用を前提とする管理言説から人々を解除し、フリーランス言説への接続を志向することにより形成されてきた。それゆえ、このシンボルの背後には、会社人間のオルタナティブを求める研究者と、しがない下請けとされがちなフリーランスが、それぞれ自由で自律的な個人という研究対象の獲得とプレゼンス向上のために結託する関係が潜む。

ただ、このような関係の陰で研究者と企業が取り結ぶもう一つの関係に注意する必要がある。騎士というシンボルの下で企業は一方的に不利益を被る訳ではなく、新自由主義が掲げる自由と自己責任の原則に基づき、利潤極大化のための人

件費削減を正当化する機会を得る。つまり、騎士というシンボルが勃興する中で、企業は従業員に対してエンプロイアビリティ (employability) ⁷の名の下、個人主導の能力開発を求め、また結果的に雇用に値する技能を獲得できなければ自己責任を理由に周辺人材を中心に整理することで雇用・育成コストの削減が可能となった。同様に、外部人材については戦略的人材ポートフォリオの名の下、企業の都合による契約の締結・解除を推進することで人件費の最適化を実現しえた。

騎士としてのフリーランスを賛美する研究者は、このような企業を批判するどころか黙認またはその意義を強調する。実際、DeFillippi and Arthur (1998) は、企業内の基幹人員と外部人材を巧みに活用するプロジェクト組織を、迅速性や柔軟性、多様性に富む革新的形態として賞賛する。そのため、企業が騎士としてのフリーランス支援を目指し、このような組織構造を用いることは賞賛されつつ人件費削減の手段と化す。ここに企業と研究者が結びつき、フリーランスの支配を目論むもう一つの権力関係が成立する。

騎士としてのフリーランスというシンボルは、以上のような各主体の利害が交錯する中で形成・強化されてきた。そのため、自由や自律という側面が強調される一方、例えば大手広告会社を頂点とする分業構造において、下請け業に勤しみながら業界の再生産を担うフリーランスの隷属的な側面が隠蔽されるのである。

3.2 従僕としてのフリーランス

もちろん、フリーランス達は一握りの大企業を基点とする分業構造に組み込まれていることに無自覚なわけではない。シアルコットの縫子達と同様、彼らは自らが騎士の名を借りた被支配者であることを意識的に語ることでフリーランス言説に潜む支配の構造を暴露していく。

フリーというのは、失業者予備軍みたいなものでどうにでもなるというか…。ですから、ものすごく素晴らしいフリーの人もいますでしょうけど、だいたいピラミッドの下の方は、失業者予備軍みたいなものですから(C氏:女性ライター)

王様とド貧民の差はあるよ。クライアントが王様でフリーランスがド貧民。もう二枚舌も三枚舌も使いながら。顔も覚えてなくて名前も覚えてないけど、Dさんって呼ばれて、いや、こんにちはって言って誰やったっけとかさ。今まで大嫌いや、あいつとか思ってた人から電話がかかってきても、いやー久しぶりって平気で言えるねんもん。怖いよ、うわー怖っ。(D氏:ファッション関連)

このようなフリーランスの服従や隷属といった側面を強調する語りは、社会的弱者や従属者を想起させる「従僕」としてフリーランスをシンボル化するテキストの生産・伝播を通じてフリーランス言説に再接続されることになる。

従僕としてのフリーランスは、特定の企業に属さない周辺/非正規労働者として認知され、特に大企業の中核/正規従業員と対置される (Osterman, 1984)。ここでフリーランスは、企業から押し出され

た社会的弱者として描かれる。例えば Parker (1994) は、単なる働き手を意味するウォーム・ボディ (warm body) という用語を用い、特定の企業に属さない個人が、低賃金や契約の不安定性、長時間労働など正規従業員と比べて劣悪な条件下にあることを示す。さらに Granger et al. (1995) は、英国のフリーの校正者の大半が企業から締め出された難民であり、正規従業員への復帰を切望していると主張する。以上のように、従僕としてのフリーランスは、特定の企業に属せない、労働市場の周辺に追いやられた弱者であり、彼らの増大は社会的に憂慮すべき事態として捉えられている (e.g., Christensen, 1998)。これらのテキストは、周辺/非正規労働者としてのフリーランスが直面する過酷な実態を強調する。従僕としてのフリーランスというシンボルは、構造的差別に晒される弱者を研究対象として求める研究者と、労働条件の向上を図るフリーランスの共謀関係から生み出されているのである。

ただ騎士というシンボルの構築と同様、従僕というシンボルの陰で研究者と企業を取り結ぶもう一つの関係に目を向ける必要がある。フリーランスを従僕としてシンボル化することで企業は富の収奪者として一方的に糾弾されるわけではない。個人が外部労働市場に身を置くデメリット (収入の不安定性や社会的地位の低下等) を周知させることで、より高い自由度を求める従業員を巧みに支配し続ける

機会を得る。つまり、従僕的な語りが増えられる中、企業によるデュアル・ラダー (dual ladder) の整備は、キャリア・パスの自由度を求める人材の囲い込みに寄与しうる。また、業績連動型の評価報酬制度の導入は、基幹人員のモチベーションの維持・向上に一定の効果を上げた。

当然、従僕としてのフリーランスの増大に警鐘を鳴らす研究者は、このような企業の取り組みを黙認あるいは推奨する。例えば Barney and Wright (1998) は、企業が持続的競争優位を築く上で、汎用的スキルよりも特定の企業でキャリアを積むことで徐々に備わる企業特殊スキルが組織の存続・発展においてより重要で価値があると強調する。そのため、企業が特殊スキルの伸長に積極的に取り組むことは評価されつつ有能な人材を長期的に管理下に置くための手段と化す。ここに企業と研究者を繋ぐ関係が成立する。

従僕としてのフリーランスというシンボルは、以上のような各主体の利害が重なる中で形成されてきた。ここでは、服従や隷属という側面が強調される一方、フリーランスの肯定的側面はもちろん、既存の権力関係に無自覚または一方的に隷属させられるのではなく、その中で戦略的に振る舞う主体の実践が隠蔽されることになるのである。

3.3 英雄としてのフリーランス

それでは、フリーランス達は、コンテンツ産業の権力関係の下で自由かつ自律

的な立場に矜持を抱く騎士として語るか、または従僕として自らの隷属ぶりを嘆くことしか許されないのであろうか。ここで見出されるのは、フリーランスの中でも特にクリエイター⁸という主体が、自由や自律を強調する騎士的な語りにも創造や変革の意味を加え、ビジネスモデルの革新や新たな市場の開拓を担う「英雄」として振る舞い始めていることである。

僕ら中心人物は、今の仕事をどんどん縮小させていって、ビジネスを新しい方向に向かわすしかありませんよ。まあこのモデルは他にないから、そういう意味で、ビジネスモデルって山ほどあると思いますけど、新奇性がなかったらはっきり言って難しいと思うんですよ、パイの奪い合いにしかならんから。(中略)全然こんな枠組みから外れている活動やから面白いと思いますけどね。(中略)僕なんかは広告業界の中にいようと思ってないから、そもそも。企業があって、そのパートナーやから。(中略)予算の半分とかか代理店ってなんやねんってカンジで、紹介料みたいなね。(E氏:男性アートディレクター)

このE氏は、クライアントとの直接取引に基づくブランディング・デザイン⁹や、それを大規模展開するための任意団体の整備、それらの事業を促すためのクライアントへの啓蒙活動¹⁰といった新たなビジネスモデルの構築を通じて、コンテンツ産業における既存の制度—垂直的分業体制やその下での不透明な取引慣行—との決別を目論む。その際、先述した騎士でも従僕でもなく、自由と創造性を体現する英雄として語ることで、自らをフリーランス言説に解除—再接続していく必

要に迫られるのである。

ただここで注意すべきは、企業・産業レベルで創造性とイノベーションの架橋を通じた新たな価値の提供の重要性を説く Caves (2000) や、知的労働者をはじめ創造性を通じて経済的価値を付加するクリエイティブ・クラスが世界経済を牽引し、競争の成否を左右することを訴える Florida (2002) など、創造を強調する議論は近年盛んに重ねられているが、自由と創造を結び付けた学術的テキストはほとんどみられないことである。むしろ、フリーランス達が各種媒体等で「英雄」として語ることで、シンボルとして形成されつつある¹¹。フリーランスの中でもとりわけクリエイター達は英雄という仮面を被り、自由と創造に関するテキストを生産・伝播し正統性を纏うことで、眼前の問題解決や閉塞状況の打破をなし得る資源動員を図っているのである。

なお、騎士や従僕と同様、このシンボルの背後にも自由・自律に加え創意工夫の余地に富む仕事を求めるフリーランスと、新たな事業機会の獲得を目指す主体—英雄譚を求めるマスコミや既存の業界構造の変革を通じて産業振興を図る行政等—が結託する関係が潜んでいる。また、このような権力関係に自由かつ創造的な活動を実践する主体の獲得を目指すシュンペータリアン／企業家研究者が荷担することで、英雄としてのフリーランスを称揚するテキストの生産・伝播が更に強化されうる。

英雄としてのフリーランスというシンボル化は、以上のような各主体の利害が重なる中で萌芽的に形成されつつある。ただ、英雄としてのフリーランスは自由に加え創造性が強調される一方、彼らと創造性が仕事において必ずしも結びつかない側面（大企業を頂点とする構造が依然支配的な中、創造的とは名ばかりの細分化された末端業務が存在すること）が、見逃されることになるのも忘れてはならない。

4 おわりに

本論文では、フリーランス言説の分析を通じて、テキストの生産・伝播に不可避に生じる権力関係の構築プロセスとして、制度化を分析することを試みてきた。最後に、これまでの議論を踏まえて先行研究への理論的貢献について言及する。

まず、フリーランスに関する研究への示唆として特に注目されるのが英雄のシンボルである。例えば Barley and Kunda (2004) は、フリーランスに関する先行研究が、本研究での騎士-従僕の対立軸で構成されてきたと指摘する。その上で、彼らは綿密なフィールドワークからフリーランスの間で流通する Guru (達人), Hired Gun (腕利き), Warm body (単なる働き手) という類型を見出す。確かに、このような類型化により騎士-従僕の単純な対立軸を超えたグラデーショナルな現象の理解が促される。しかし、クライアントにとって頼みの綱である Guru で

さえ、発注・受注という既存の権力関係下での導師であり、変革を志向する主体としては十分位置づけられていない。つまり、彼らの類型化は固定化された既存の言説=制度下での主体の実践をより豊かに理解することに止まるといえる。

他方で、本研究が見出したフリーランス自身が自らを「英雄」としてシンボル化するという言語的戦略は、この騎士-従僕という対立軸の下で、自由と創造を強調する抵抗的な語りにより既存言説からの解除と（再）接続を試みるフリーランス達の実践を通じて生み出された。実際、彼らと英雄譚を求めるマスコミや地域産業の振興を図る行政らにより取り結ばれる権力関係が、コンテンツ産業の次なる闘争の局面を準備するのである。

ただここで注意すべきは、このような抵抗的な言語戦略によりフリーランス言説=制度が固定化されるわけではないことである。英雄としてのフリーランスというシンボルの萌芽により、騎士-従僕という対立軸の下で事業を展開していた企業は一方的な不利益を被る訳ではなく、新たな抵抗の機会を得る。たとえば英雄というシンボルが台頭する中、クリエイターの養成学校は、「未来のフリーランス・クリエイターへの第一歩」という語りを用いて若者に英雄への憧憬を煽ることで学生の継続的確保が可能となる。また、既存の構造下で支配的地位にある大手広告会社に代表される仲介企業は、自由かつ創造的な活動への専念という甘美

な言葉を用いることで仲介者としての立場を保持できるだけでなく、フリーランスを英雄として掲げることで新たなビジネスを展開できると考えられる。

最後に、言語的戦略という視座から改めて注目されるのが制度的企業家概念である。例えば本論文では、新たなクライアントや協力者を獲得するために英雄として振る舞うフリーランス・クリエイターに注目した。彼らは、フリーランス言説の下で構築される大手広告会社を頂点とした支配関係に抵抗の機会を見出し、自ら英雄として振る舞うことで自らの抵抗を正統化する主体と関係を取り結び、資源を動員しうる機会を得ている。この意味で、制度的企業家とは特殊な動機と能力を持つ制度から超越した主体ではなく、制度の下で動機と機会を獲得し、自らの正統化と資源動員を図る主体であると捉え直すことができる (e.g., 松嶋・高橋, 2009)。その際、制度的企業家の行為は、言説への解除・(再)接続を図る言語的戦略から具体的に分析していくことが可能であると考えられる (Phillips et al., 2004, pp. 647-648)。

¹ 本来的に組織フィールドとは、正統性を獲得した主体によって構成される、支配的な権力関係として提起された概念である (Phillips et al., 2004, p. 639-640)。

² フリーランスとは特定の企業と(長期)専属契約を結ばない自由契約者を指す。

³ 例えば Barley and Kunda (2004) は、フリーランスに関する先行研究の論点をフリー・エージェント視点 (free agent perspective) と制度的視点 (institutional perspective) とに大別する。前者では契約労働者が享受する自由や自律が強調され、後者では彼らが直面する過酷さや不安定性、副次

的存在である彼らの増大に起因する社会問題が強調される。つまり、前者は本研究における騎士に、後者は従僕に相当するといえる。また後に詳述するが、英雄は近年のフリーランスの発話や関連テキスト等の生産・伝播を通じて萌芽的にシンボル化されたものとして発見的に提示するものである。

⁴ 職種はグラフィック・デザイナーやライター、エディター、イラストレーター、プロデューサー、スタイリストなど多岐に渡る。

⁵ 学術文献以外に、例えば宣伝会議やブレン、Pen, Real Design 等の雑誌を始め多数の関連テキストを参照している。

⁶ 具体的には、21名 (男性12名、女性9名) のフリーランス・クリエイターへの詳細な聞き取り調査を始め、関連する会合等のヒアリング・観察、異業種交流会での非公式な対話等を行っている。加えてクライアント企業2社 (金融系シンクタンク、大手印刷会社)、エージェント企業1社、創業支援施設1機関に対する綿密な調査を通じて、フリーランス及びコンテンツ産業に関する多角的データを収集している。

⁷ 社員に自己のキャリア・マネジメントやスキル開発の責任を負担させる一方、企業は社員のスキルの伸長を支援するという交換関係を意味する。しかし例えば Cappelli (1999) は、実際にはエンプロイアビリティがキャリアへの責任を社員に転嫁する方策として機能していることを指摘する。

⁸ 編集・出版、広告・企画、映像、ソフト系 ICT などの制作を担う者を指す。

⁹ 企業や自治体等のロゴやカタログ、サイトといった一連の媒体のデザインにより組織全体の価値向上を図る活動を指す。

¹⁰ 具体的に、企業向けセミナーの開催等を通じて自社ブランディングの重要性やそれを確立する際のデザインの意義を伝達する活動を展開している。

¹¹ 例えば、わが国の代表的なフリーランス・クリエイターである佐藤可士和氏や奥山清行氏、ナガオカケンメイ氏は雑誌や書籍を始め様々な媒体で英雄としての語りを展開している。

引用文献

- Barley, Stephen R. and Gideon Kunda
(2004) *Gurus, Hired Guns, and Warm Bodies: Itinerant Experts in a Knowledge Economy*, Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Barney, Jay B. and Patrick M. Wright
(1998) "On Becoming a Strategic Partner: The Role of Human Resources in Gaining Competitive Advantage," *Human Resource Management*, Vol.37, No.1, pp.31-46.
- Bridges, W. (1994) *Job Shift: How to Prosper in a Workplace without Jobs*,

- Reading, MA: Addison-Wesley.
- Cappelli, Peter (1999) *The New Deal at Work: Managing the Market-Driven Workforce*, Boston, MA: Harvard Business School Press. (若山由美訳 (2001)『雇用の未来』日本経済新聞社).
- Carson, R. (1962) *Silent Spring*, Greenwich, Conn: Fowcett (青樹築一訳 (2001)『沈黙の春 改訂版』新潮社).
- Caves, Richard E. (2000) *Creative Industries: Contracts between Art and Commerce*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Christensen, Kathleen (1998) "Countervailing Human Resource Trends in Family-Sensitive Firms," in Kathleen Barker and Kathleen Christensen (eds.), *Contingent Work: American Employment in Transition*, Ithaca, NY: ILR Press, pp.103-125.
- Clegg, Stewart R., David Courpasson and Nelson Phillips (2006) "Discursive Theories of Organizational Power," in Stewart R. Clegg, David Courpasson and Nelson Phillips (eds.), *Power and Organizations*, London: Sage Publications, pp. 290-319.
- DeFillippi, Robert J. and Michael B. Arthur (1998) "Paradox in Project-Based Enterprise: The Case of Film Making," *California Management Review*, Vol.40, No.2, pp125-139.
- Florida, Richard (2002) *The Rise of the Creative Class: And How It's Transforming Work, Leisure, Community and Everyday Life*, New York: Basic Books (井口典夫訳 (2008)『クリエイティブ資本論：新たな経済階級の台頭』ダイヤモンド社).
- Foucault, Michel (1969) *L'archéologie du savoir*, Paris: Gallimard (中村雄二郎訳 (1981)『知の考古学』河出書房新社).
- Foucault, Michel (1977) *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*, Harmondsworth: Penguin Books (田村健訳 (1977)『監獄の誕生: 監視と処罰』新潮社).
- Granger, Bill, John Stanworth and Celia Stanworth (1995) "Self-Employment Career Dynamics: The Case of 'Unemployment Push' in UK Book Publishing," *Work, Employment and Society*, Vol.9, No.3, pp.499 - 516.
- Greenwood, Royston, Christine Oliver, Kerstin Sahlin and Roy Suddaby (2008) "Introduction," in Royston Greenwood, Christine Oliver, Roy Suddaby and Kerstin Sahlin (eds.), *The Sage Handbook of Organizational Institutionalism*, London: Sage Publications, pp. 1-46.
- Handy, Charles B. (1994) *The Empty Raincoat: Making Sense of the Future*, London: Hutchinson.
- 早川良雄 (1986)『徒然感覚』用美社.
- Khan, Farzad R., Kamal A. Munir and Hugh Willmott (2007) "Dark Side of Institutional Entrepreneurship: Soccer Balls, Child Labor and Postcolonial Impoverishment," *Organization Studies*, Vol. 28, No. 7, pp. 1055-1077
- Lawrence, Thomas B. (2008) "Power, Institution and Organizations," in Royston Greenwood, Christine Oliver, Roy Suddaby and Kerstin Sahlin (eds.), *The Sage Handbook of Organizational Institutionalism*, London: Sage Publications, pp. 171-197.
- Maguire, Steve and Cynthia Hardy (2009) "Discourse and Deinstitutionalization: The Decline of DDT," *Academy of Management Journal*, Vol.52, No.1, pp.148-178.
- Malone, Thomas W. and Robert J. Laubacher (1998) "The Dawn of the E-Lance Economy," *Harvard Business Review*, Vol.76, No.5, pp. 145-153.
- 松嶋登・高橋勅徳 (2009)「制度的企業家というリサーチ・プログラム」『組織科学』第43巻1号, 43-52頁.
- Meyer, John W. and Brian Rowan (1977) "Institutionalized Organizations: Formal Structure as Myth and Ceremony," *American Journal of Sociology*, Vol. 83, No. 2, pp. 340-363.
- Osterman, Paul (1984) *Internal Labor Markets*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Palmer, Donald A., P. Devereaux Jennings and Xueguang Zhou (1993) "Late adoption of the multidivisional form by large U.S. corporations: institutional, political, and economic accounts," *Administrative Science Quarterly*,

- Vol.38, No.1, pp.100-131.
- Parker, Ian (1992) *Discourse Dynamics: Critical Analysis for Social and Individual Psychology*, London: Routledge.
- Parker, Robert E. (1994) *Flesh Peddlers and Warm Bodies: The Temporary Help Industry and its Workers*, New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.
- Phillips, Nelson, Thomas B. Lawrence and Cynthia Hardy (2004) "Discourse and Institutions," *Academy of Management Review*, Vol.29, No.4, pp.635-652.
- Pink, Daniel H. (2001) *Free Agent Nation: The Future of Working for Yourself*, New York: Warner Books (池村千秋訳 (2002) 『フリーエージェント社会の到来』ダイヤモンド社) .
- 佐藤俊樹 (2006)「関のありか: 言説分析と「実証性」」佐藤俊樹・友枝敏雄編『言説分析の可能性: 社会学的方法の迷宮から』東信堂, 5-25 頁.
- Zilber, Tammar B. (2007) "Stories and the Discursive Dynamics of Institutional Entrepreneurship: The Case of Israeli High-Tech after the Bubble," *Organization Studies*, Vol.28, No.7, pp.1035-1054.